

浄土

monthly JÔDO

法然上人讃仰会

2017 April

4

貧乏董骨

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



(上) 左右 130 ミリ、天地 130 ミリ。上部の突起に焦げ跡。内側は砂つぶが認められるほか、日にかざして動かすと、小さく光るガラス質の粒もある(下) 左右 90 ミリ、天地 60 ミリ。いずれも外側は内面に比べ滑らかな仕上がりにある。約 5,000 年ほど昔のものである。

写真の縄文土器の残欠は、十数年前に骨董市で手に入れたものである。これが縄文時代のいつごろのものなのか気がかかっていた。縄文時代はかつて前期、中期、後期の三期に分けられていたが、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期という区分が今では定着している。三期ではおさまらない多様性を持つのだろう。年代的には約一万五〇〇〇年前から約二三〇〇年前ということになる。

東京都三鷹市に「みたか遺跡展示室」というものがあるのを知ったのはつい最近である。府中から三鷹にかけての一带は、旧石器時代、縄文時代の集落跡が多数あり、ここからの出土品が展示されている。展示室といってもプレハブ造りの建物の二階の十六畳ほどのスペースに、三鷹市の遺跡から出土したものが並べられているだけで、博物館というわけでは

ない。その日の見学者は私ひとり、年配の女性が案内してくれた。旧・新石器時代の石器や縄文時代、弥生時代の出土品が展示されている。そのなかに縄文時代中期の始めごろに作られたという、一体の土偶があった。一目見て私は案内の女性に「これは縄文のビーナスによく似ていますね」と声をかけた。女性は目を輝かせて「そうなんです！ そっくりでしょう」と大喜びである。少しうちとけてきたところで、私はこの土器の写真を見てもらうことにした。

カメラのモニタに写真を映し出し「実は、この縄文土器の残欠ですが、いつごろのものかわかりますか」女性は即座に「中期のもですね、この土偶よりすこし後でしょう。いい模様が残っていますね。この点々の連続は竹を割って、その断面で繰り返して刻んでいたのですよ」と教えてくれた。そして「模様がこれによく似ていますね」と展示品の比較の大きな土器まで案内してくれた。見比べるとたしかによく似た模様が刻まれている。

女性に「考古学を専攻していらっしゃるのですか」と尋ねてみた。女性はあわてたように「いえいえ、ボランティアで、調査発掘の手伝いをしていただけなんです」と、穴を掘る仕事まじりに答えてくれた。ボランティアで遺跡の発掘というのも、いい余生の過ごし方だなと、彼女を少しうらやましく思ったのだ。まあ、わたしに余生などという、けっこうなものがあればの話だが。

東京・江東区

正覚院

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

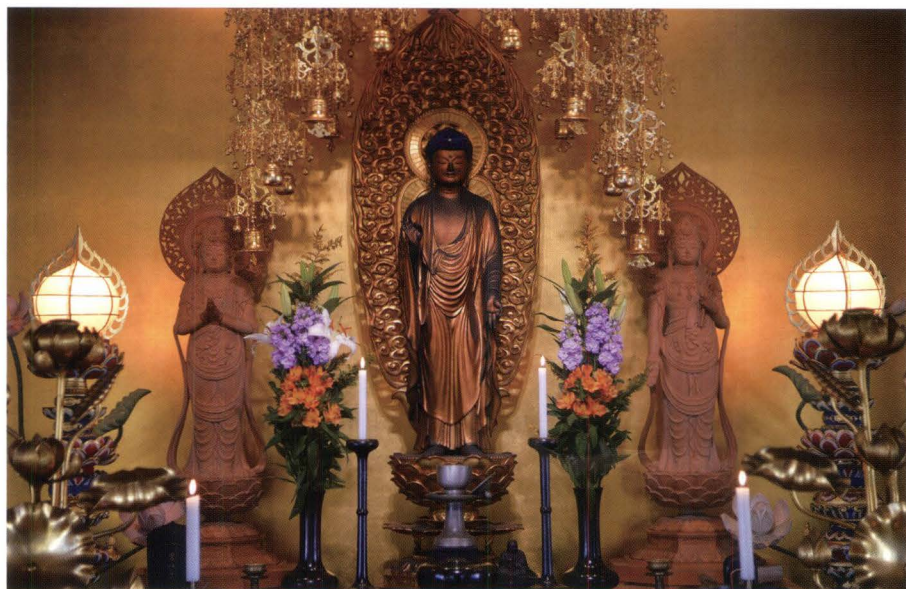
寺院紀行



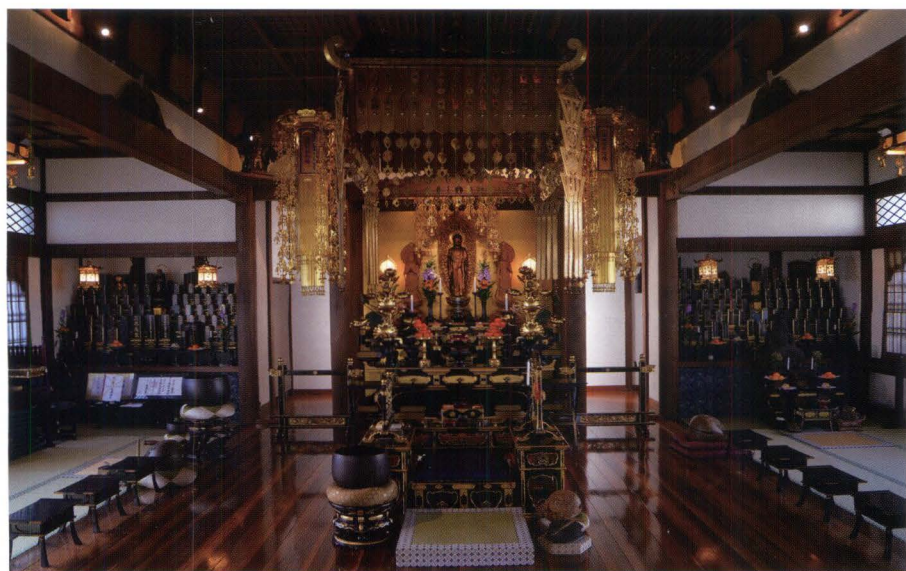
安孫子虔悦正覚院住職。昭和19年に山形の浄土宗寺院天崇寺で生まれ、大学時代より正覚院に随身、現在に至る。真面目で実直、人望が厚い住職だ。



昭和35年に建立され、平成25年に耐震補強された本堂。毎月仏教情報センターの「いのちを見つめる集い」がこの本堂で開かれている。



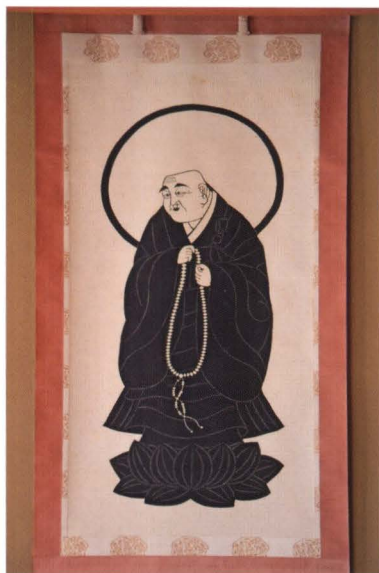
正覚院本尊、阿弥陀如来像。昭和20年3月の空襲で本堂と共に本尊も焼失。現在の本尊はその後お祀りされた。



内陣の左右脇陣には位牌が並んでいる。右手には閻魔像が祀られている。



御忌法要で安孫子住職が身につける七条袈裟。柄は芹沢銈介氏によるもので、何ともいえぬ味のあるデザインだ。左は大師五条袈裟。



染色工芸家、人間国宝の芹沢銈介氏による法然上人像。本堂脇の客殿に飾られている。安孫子住職の義理の姉が芹沢銈介氏の弟子だったという。



こちらも芹沢銈介氏の法然上人像。芹沢氏は法然上人に心酔されていて、本誌の表紙を書かれたり、寄稿もされている。

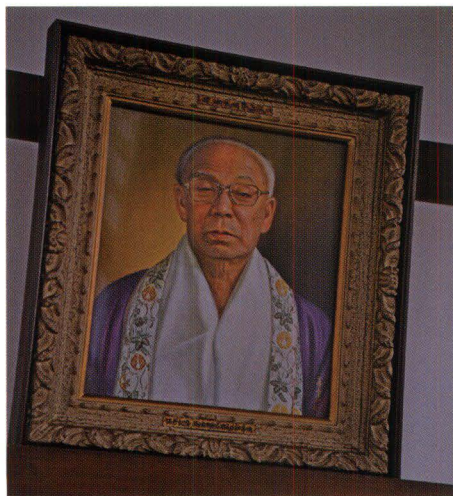


平成29年1月25日の増上寺本堂での御忌伝達式で八木季生台下から手渡された教書。本堂脇陣に飾ってある。

正覚院の入り口。玄関前には法事の案内板が立っている。



玄関を入ると、手書きのお知らせ文で御忌唱導師の案内がされていた。檀信徒にとっても思い出しに残る御忌になるに違いない。



本堂には正覚院先代住職の稲田稔界師の額が飾ってある。浄土宗を代表する傑僧のひとりだ。

浄土

2017/4月号 目次

カラーグラビア＝寺院紀行 東京 江東区 正覚院	写真＝真山剛	1
連載 私の好きなご法語	高橋弘次	6
連載 法然上人と親鸞聖人(九)	林田康順	8
寺院紀行 東京 江東区 正覚院	真山剛	14
連載 響流十方	袖山榮輝	20
連載小説 渡辺海旭⑦	前田和男	24
連載 誌上句会	選者＝無縫庵烏鷺坊	32
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	35
編集後記		36



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 表紙写真＝鬼海弘雄
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

尼入道の無智の輩に同じうして

智者のふるまいをせずして

ただ一向に念仏すべし 『一枚起請文』

黒谷金戒光明寺の山門に後小松天皇がお書きになった「浄土真宗最初門」という額がございます。「浄土真宗」というと、東西本願寺さんを中心とした宗派ではないかと思われるのですが、実際は法然上人も古くから「浄土真宗」という名前を付けて掛け物に書いておられるように、元々は特定の宗派の呼び名ではありません。

「最初門」とありますから、お念仏が始まったのはこのお寺からですよと言って、後小松天皇が揮毫された立派な額です。

その後小松天皇のお子さんに一休宗純（一三九四～一四八二）さんがおられます。一休さんは頗知で有名ですが、たくさんの本を書いておられます。その一つに『狂雲集』があります。

この『狂雲集』の中に法然上人を讃えた文章が、版本で黒谷に残っています。

伝聞法然生如来 安座蓮華上品台
尼入道同無智輩 一枚起請最寄哉

前大徳一休叟

（法然上人は「生き佛」と伝え聞いている。いま上人は浄土の蓮華の最上段に座っておられる。尼入道と同じ無智の人のようであれ、と述べられている『一枚起請文』は、最も奇特の書であると思うのです。大徳寺の前住職一休翁。）

他にも、一休さんは浄土宗の教えや法然上人さんが立派だということを書き連ねているのです。

有漏路より 無漏路に帰る一休み

雨ふらば降れ 風ふかば吹け

と何でもやってのけられた一休さん、風狂に生きた禪師は、特に「一枚起請文」のこの最後の言葉が気に入ったようです。

この「一枚起請文」の本物がここ黒谷の金戒光明寺にあります。毎年四月に法然上人の御忌をとめ、四月二十三日は皆さんに拝んで頂けます。是非お参りください。

金戒光明寺法主

高橋弘次

台下

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載九〕

——法然上人が捉えた
阿弥陀仏——

林田 康順

（大正大学教授）

浄土宗の教えの三本柱——所求・所帰・去行——

ここまで縷々述べてきたように、法然上人は、「浄土三部経」の主旨は終始一貫しており、いずれも阿弥陀仏を主人公とし、極楽浄土への往生を促し、そのために本願念仏の一行をもっぱら修めるべきことを勧めている、と捉えられました。これら極楽浄土・阿弥陀仏・本願念仏は、それぞれ所求・所帰・去行といい、浄土宗の教えの三本柱に据えられます。そこで、この三本柱について、順次、法然上人のご法語を通じて、その肝要をお伝えします。その正確な把握が、結果として、法然上人と親鸞聖人の教えの相違を速やかに理解することにつながるからです。

十劫正覺

遙かな過去世、世自在王如来のもとで出家した法蔵菩薩は、あらゆる世界の衆生を救うために五劫にわたり思惟して四十八願を建立し、その誓願を成就するために兆載永劫（ちようさいえいこう）という果てしない時間にわたって行を修め、今から十劫前に阿弥陀仏として成仏されました。阿弥陀仏は、その寿命も、救いの働きを及ぼす光明も無量であり、諸仏によりその妙なる功徳を讃えられています。そして、この娑婆世界から西方十万億の彼方に極樂浄土を建立され、現に今、そこで法を説いておられるのです。以上のような、法然上人が捉えた阿弥陀仏は「浄土三部経」に説示される通りであり、行に報いてさとりを開かれた仏（報身）です。法然上人は、そうした阿弥陀仏に帰依する理由を次のように述べられます。

諸仏のなかに弥陀に帰したてまつるは三念五念にいたるまでみづから来迎し給う故なり。『一紙小消息』昭法全四九九

（試訳） 無数の仏の中から阿弥陀仏におすがりする理由は、三遍とか五遍といったほんの少しのお念仏しか称えなかった者であっても、臨終には阿弥陀仏自らが来迎して下さるからです。

なるほど、さまざまな経典には、本門・迹門（ほんもん・しきもん）など多様に描かれる釈尊をはじめ、阿闍仏（あせつ）、薬師仏、毘盧舍那仏、大日如来など、実に多くの仏が登場します。それら多くの仏がいる中で法然上人は、阿弥陀一仏に帰依するのは、修行のままならない私達でも、お念仏を称えれば、必ずお迎え下さるからと主張されるのです。

人みな悪人なり―法然上人の人間観―

さらにその理由について法然上人は、次のようにお示しです。

世すでに末法になり、人みな悪人なり。〔念仏往生要義抄〕昭法全六八一

（試訳） この世はすでに末法となり、人々は煩惱をとどめ難い悪人に他ならないのです。）

法然上人は、釈尊の教えばかりが残り、満足に行を修めることもままならず、ましてやさとりを聞くことなど到底不可能な時代である末法・末代に生きる私達は、どれほど經典を学び尽くそうとも、經典や各宗派が提示する仏道修行を推し進めていくことなど叶わない存在であり、だからこそ、これから先も六道輪廻の世界を経巡り続けるであろう凡夫（ほんぶ）に他ならない、と述べられます。そうした自覚を抱くことができた時、そんな私達をお救い下さる阿弥陀仏に帰依する心が自然と湧き起こってくるのです。

親子のごとく

法然上人は、多くのご法語の中で、阿弥陀仏の尊さを伝え遺されていますが、ここでは二つのご法語を紹介します。

衆生、仏を礼すれば、仏これを見給う。衆生、仏を称うれば、仏これを聞き給う。衆生、仏を念ずれば、仏も衆生を念じ給う。かるがゆえに阿弥陀仏の三業（さんごう）と行者の三業と、かれこれひとつになりて、仏も衆生も親子のごとくなるゆえに、親縁と名づく。〔往生浄土用心〕昭法全五五九

（試訳） 衆生が阿弥陀仏を礼拝すれば阿弥陀仏はその姿をご覧になって下さり、阿弥陀仏の

名号を称えればその声を聞き取って下さり、心に阿弥陀仏を念ずれば、同じように私達のことを念じて下さるのです。このように、阿弥陀仏の三業のお働きが、私達の三業の働きと互いに応じ相い、あたかも阿弥陀仏と私達とは親子の関係のようですから、これを親縁といのです。）

私達がこの身で阿弥陀仏を礼拝し、お花を供え、お灯明を灯し、お香を焚き、掌を合わせる姿を阿弥陀仏はその御目で見て下さいます。私達がこの口でお念仏を称え、お経を誦誦し、ご詠歌を唱える声を、阿弥陀仏はその御耳で聞いて下さいます。そして、私達の悲しみや苦しみ、あるいは、喜びや楽しみといった思い（意）を阿弥陀仏に届ければ、阿弥陀仏は私達の思いをその御心にしっかりと受けとめて、慰め、励まし、共に喜んで下さるのです。このように阿弥陀仏と私達との身口意の三業の働きにおいて、呼べば応えるという相対的關係が成立するのが浄土宗の阿弥陀仏なのです。そして、あたかもそれは親子のような関係で、優しい母親が幼いわが子をお守り下さるように、一対一で私達をお救い下さる仏なのです。

わが身をすて給う事なし

そんな阿弥陀仏が、お念仏を本願往生行として選択されました。そこで、次のご法語です。

弥陀の本願を決定成就して、極楽世界を莊嚴したてて、御目を見まわして、わが名となうる人やあると御覧じ、御耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜昼きこしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずという事なし。されば摂取の光明はわが身をすて給う事なく、臨終の来迎はむなしき事なきなり。（『示

或人詞』昭法全五八八)

(試訳 阿弥陀仏はその本願のお誓いを成就して、極楽世界を作りあげられました。そして、その御目を見まわして、わが名を称える者はいないだろうかとお覧になり、御耳をかたむけて、わが名を呼ぶ者はいないだろうか、昼も夜もお聞きになられているのです。それ故、たつたひと声のお念仏であつても、阿弥陀仏がお気づき下さらないことありません。それ程までにして極楽に救い摂らうとする阿弥陀仏の光明が、あなた一人をお見捨てになるはずもなく、臨終に來迎されることが偽りであろうはずありません。)

阿弥陀仏は、浄土往生のための行としてご自身で誓われたお念仏を称えている者はいないだろうか、御目を見回して探して下さり、御耳を傾けて聞いていて下さるのです。お念仏による救済は、私達凡夫同士の約束ではありません。成仏された阿弥陀仏がお誓いになられたお約束ですから、阿弥陀仏が念仏行者を見逃したり、お念仏の声を聞き逃したりされることは決してないのです。ですから、命ある時には、その無量の光明が私達をお守り下さり、私達が命終える時には、必ずや阿弥陀仏が自らお迎えに來て下さるのです。

温もりのある仏様

学問として仏教を学び始めると、真理そのものとしての仏、この大宇宙を主宰する働きそのものとしての仏、つまり、法身に位置づけられるような仏をより高度な仏として位置づけてしまいが勝ちです。そして、ともすると「浄土三部經」に説示される阿弥陀仏は、法然上人がいらつしやつた八百年前はさておき、科学的合理主義が進んだ現代においては受け容れ難いなどと主張する方

さえます。しかし、それは現代人のおごりであって、すでに法然上人以前からそうした議論は積み重ねられ、もちろん法然上人は私達の何倍も理解を深めておられます。

そうした中で、はたして法身に位置づけられるような仏は、私達一人一人にどのような働きを施して下さるのでしょうか。当時の多くの僧達による「この世のすみずみにまで法身の力は行きわたっている」という主張に対して法然上人は、「この世のすみずみにまで法身の力が行きわたっているのであれば、どうしてこれほど多くの方々が苦しみに苛まれ続けなければいけないのだろうか」とお悩みになられたことでしょう。少なくとも法然上人は、こうした法身のような仏格を人々に説き勧められることは決してありませんでした。もちろん、私達一人一人が、こうした苦しみ多い現実世界を幸せに満たされたお浄土のような世界にすべく努力することはとても大切なことです。しかし同時に、この世が娑婆世界に他ならないという厳然たる事実もまた見逃してはいけません。

だからこそ阿弥陀仏は、そんな娑婆世界に生き、自身の力では六道輪廻の世界を離れ出ることがままならない私達を悲しみ哀れんで、五劫思惟の末に四十八願を建立され、兆載永劫のご修行の末、今から十劫前に成仏されたのです。まさに阿弥陀仏は、私達にとって温もりに満ちた仏なのです。そんな阿弥陀仏が、自身の四十八願の第十八念仏往生願において、わが名を呼べば、必ずあなたのことをわが浄土に迎え導こうとお誓い下さったのです。

以上が、法然上人が受け止められた浄土宗の阿弥陀仏理解の基本です。

寺院紀行

東京・江東区

正覚院

文・撮影／真山剛



深川江戸資料館通りに面する正覚院。正面奥右手が本堂、手前が客殿、右に庫裏が並ぶ。

昨年、浄土宗から『新纂 浄土宗大辞典』が発刊された。昭和四十九年から八年の歲月をかけて刊行された全四巻の『浄土宗大辞典』を新たに編み直したもので、今回は項目数が最初の辞典から五割弱増えた約九千項目を掲載する千八百四十一頁の大辞典となった。その数ある項目の中にある「稲田稔界」、そして「正覚院」の項目を執筆されたのが、今回訪れた正覚院の第十九世、安孫子虔悦住職である。

正覚院は江東区三好、大江戸線清澄白河駅からすぐの江戸資料館通りにある。江戸資料館は昭和六十一年に開館した江戸の資料を展示収集する公共施設だが、その江戸を代表する名刹、関東十八檀林として名高い靈巖寺の子院のひとつが正覚院で、靈巖寺山門の前に位置する。恐縮だが、安孫子住職が執筆者ということで、『新纂 浄土宗大辞典』の『正覚院』を転記させていただくことにする。

しょうがくいん【正覚院】

（前略）開山長譽伝久。寛永六年（一六二九）の草創。桜井松平遠江守忠俱が開基、寛永十六年（一六三九）に没し、正覚院殿と号した父掛川藩松平忠重の菩提のために建立。靈巖寺一山の塔頭で、同寺には称三別院、子院八院、発意八庵、七溪学舎などがあつたが、正覚院は子院の一つ。松平忠継の優遇により増上寺別院の称を得た。並木五瓶、奥倉魚仙の墓があり、歌舞伎の萬屋一門の菩提寺である。

（後略）

そしてこの正覚院の歴代住職で同じく同辞典の項目となっているのが、稲田稔界前住職である。こちらも安孫子住職が執筆されている。

いなだねんかい【稲田稔界】

明治三十九年（一九〇六）一月一日―平成二年（一九九〇）一二月二一日。明星光院芳蓮社瑞譽雲阿紫迎。近代浄土宗政治家として活躍。宗門功労者。東京深川に生まれる。大正



客殿二階の間には芹沢銈介氏の法然上人像が飾られている。

一五年（一九二六）増上寺にて伝宗伝戒を受け昭和二年（一九二七）宗教大学卒業、師僧五十嵐雲界没後の同四年東京正覚院の住職となる。同二〇年増上寺財務部長、同二四年建築局長となり、椎尾辦匡のもと、戦後の増上寺復興に尽くす。また昭和二十一年（一九四六）宗議会議員となり、同三六年には庶務部長、同三八年に教学局長を務め、浄土宗合同に奔走し、大きな役割を果たした。同四四年日本宗教連盟理事長、さらに世界連邦日本仏教徒協議会・日本宗教委員会各理事長に就任し、宗門外の一職を歴任。晩年総本山知恩院顧問会会長に就任し、国際仏教興隆協会の理事長現職にて逝去。享年八五歳。

と、読んでおわりの通り、個人の足跡がそのまま増上寺、浄土宗、仏教界の歴史となる傑僧である。その二十七回忌法要が昨年末に営まれたが、その稲田前住職が生前、数多くいた弟子の中から後継者としたのが、安孫子住職なのである。

安孫子住職は昭和十九年十月二十日、サクランボで有名な山形県東根にある天崇寺の長男として生まれた。地元の高校卒業後の、昭和三十八年にかけて父親も随身していた正覚院に随身。正覚院から大正大学に通うことになるが、入学直前の春彼岸前に先代稲田住職が胃潰瘍で入院、約一か月入院されたという。「当時は鼻田さんという執事と、僕より十日前に入った青森からきた先輩がいたのだけど、新参の二人ともお寺の法務や作務がわからない。入院中の葬儀や法事には先代の弟さんも手助けに来てくれたものの、とにかく、てんやわんやの中で、小僧として、大学生としての新しい人生が始まりました」

大正大学では浄土学を学び大学院に進む。果鴨キャンパスでは多くの学友に恵まれた。正覚院の近隣寺院にも同級生や後輩がたくさんいたこともあり、大学時代、そして浄土宗の青年僧侶時代から現在に至るまで、色々な活動と一緒に生きてきている。ご用意いただ

戦災にあったこの地域の寺院墓地は一区画が小さい。正覚院も例外ではない。



いたプロフィールを抜き書する。

30歳の時、全国浄土宗青年会が発足。同時に正覚院が属する東京教区江東組にも青年会が誕生、以来江東組青年会、東京教区青年会などで活躍、会長職など要職を歴任する。35歳で京都化野^{あだしの}念佛寺の二女と結婚、正式に正覚院後継者となる。平成二年の前住職^{せんしゆ}遷化に伴い47歳で正覚院住職に。53歳、東京教区教化団副団長就任。55歳、国際仏教興隆協会常務理事就任。57歳、浄土宗報恩明照協会常務理事就任、実家天崇寺住職を兼務。58歳、江東組組長就任。60歳、大正大学監事就任。63歳、仏教情報センター理事長就任。67歳、浄土宗東京教区吉水講理理事長就任、大本山増上寺布教師会副会長就任、東京都仏教連合会幹事就任。70歳、浄土宗功績委員会常任委員就任。

この他に、深川仏教会会長など、地元でも活躍。その真面目で実直な人柄、人望が宗内外で認められ続けている、ということだ。

「昭和三十八年にここに来てから一歩も外に

出てない感じだよ（笑）」とは安孫子住職。実際に山形へ行くのは春の彼岸と夏のお盆ぐらいだと言う。安孫子住職はこの江東区三好かつての靈巖町に腰を据えられ、こうした数々の役職を務めてこられたのだが、これだけ色々な経歴の中で一番話を多く伺えたのが、仏教情報センターの電話相談だった。

「これを立ち上げた一人が大正大の同級生、台東区光照院の吉水裕光住職で、彼に誘われて創設直後に入ってから、36年間続けています。誘った吉水住職は七十歳を区切りに退会したのだけれどね。

初代理事長は日蓮宗の僧侶で、現在、本門寺の貫首を務められている菅野日彰聖人。二代目が曹洞宗で、私は三代目の理事長。四代目が真言宗で、今の五代目の理事長はこの『浄土』編集長の長谷川さんだよ」

この仏教情報センターの仏教テレフォン相談だが、一般の方から仏教に関わる相談に仏教諸宗派の僧侶が電話で答えるもので、月曜



正覚院の最寄駅となる都営大江戸線清澄白河駅前にある清澄庭園。都内最初の名勝地に指定された公園である。

日から金曜日で担当宗派が割り当てられ、10時から16時まで誰でも相談できるシステムを作り上げている。最近、浄土宗の公益法人や若手僧侶がこうした電話相談を始めているそうだが、この仏教テレフォン相談が仏教界での最初の電話相談だという。

安孫子住職の話を続けよう。

「相談で多いのは戒名や位牌、布施の話。そして死後の世界への疑問や相談も多い。この死後の世界については、確か仏事信仰研究会、通称、仏信研でセンター内の全宗派の僧侶が集まって各宗派の来世観を話し合った。また、研修旅行も企画して、釈迦や『法華経』など夜中まで意見交換をした。

そうした中で気付かされたのは、浄土宗には阿弥陀仏の極楽浄土という迷いの無い道標があつて、来世についてはぶれることなく説明ができる。これは他宗からも羨ましがられた」

なるほど、そういうもののなか。

「今は浄土宗の相談員は若手僧侶が中心で、

その中で長老として続けているのは、相談を受ける中で、時代の流れや意識や考え方の変化に気付かされたり、色々勉強させてもらえるから」

細かく話を伺うと、本当に時代と共に質問内容や相談者も大きく変わってきている。と同時に、いつの時代でも変わらない根本的なものはある、とこう続けられた。

「基本的に他人の悲しみはわからない。相談にのるこつちも消化できないことはしばしばで、相談者も私たち僧侶も悩んでいる。

法然上人は、人は誰もが煩惱を拭いきれない凡夫である、と捉えられたけれど、まさにそうした煩惱や悩みの中で生きている。

浄土宗を開かれた法然上人の教えの有り難さを教えてくれたのは、学生時代に読んだ仏教書の机上学問ではなくて、数知れない電話で受けた相談者の肉声かもしれない」

さて、今年も四月を迎え、増上寺では法然上人の年忌法要となる御忌を迎えることにな

ブルーボトルコーヒー。日本初上陸のコーヒー専門店で、数年前から倉庫跡が喫茶店などになり、清澄白河はコーヒー名所となり、若者が集まる場所になっている。



る。取材で正覚院を訪れて、玄関を開けてすぐ眼に飛び込んできたのが、安孫子住職がこの御忌で唱導師をされるという手書きの案内文だった。同じ案内文が本堂にも掲示してあった。

ちなみに正覚院では福田前住職の師僧になる五十嵐雲界先々代住職が昭和四年に増上寺でこの御忌の唱導師を務められている。正覚院にはその時の「昭和四年四月 御忌會行儀次第」が残っている。抜き書きすると、

十三日 午前十時 御親修（開白）
 午後一時 大蓮寺 辨問
 十四日 午前十時 善導寺 英亮
 午後一時 正覚院 雲界
 十五日 午前九時 大蓮寺 辨達
 午後一時 雲上寺 良應

とあり、十四日の午後には五十嵐雲界先々代住職の名前が記されている。昭和四年のこの御忌を覚えていた檀信徒さんは……、おそらく大正前半のお生まれの方となる。もし、平

成二十九年の御忌にも参列される方がいらつしやればまさに吉祥、吉祥、大吉祥である。

本誌では毎年四月号で唱導師をされる住職に話を伺い続けているが、安孫子住職にも、増上寺での教書伝達式を終えた後に心境を伺うことができた。

「法主台下から直接教書を受け取り、法然上人像の前で礼拝をすると、やはり身の引き締まる思いがしました」

安孫子住職から、こちらの意図を見抜いたようなお手本通りの答えをいただきたいが、実際に御忌当日を迎え、特別な荘厳の中、喜びと共にする僧侶、そして正覚院を支え続けてきていただいた檀信徒さんに囲まれての唱導師は特別なものになるに違いない。

御忌当日の祝宴は江東組の僧侶方と檀家総代さんでお祝いすると伺ったが、その席での安孫子住職の挨拶には色々な思いがこもったものになるだろう。その思いを誌面でお届けできないのが残念である。（ルポライター）



今年二月に増上寺光摂殿で法然上人に見守られながら詠唱を奉納する安孫子住職。

摩尼まにの水、華はなの間に流れ注ぎて、樹うきぎを尋ねて上下す。その声微妙みみょうにして、苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演説す。また諸佛そふの相さう好こうを讃歎さんたんする者あり。

『觀無量壽經』第五宝池觀より

〔極樂世界の池の〕如意珠王にょいじゅおうから湧き出た宝の水は、蓮の花々の間に流れ込み、さらに宝樹をつたつて上下している。その時の水の音は譬えたとようもないほど素晴らしく、苦・空・無常・無我・諸波羅蜜の教えを説き表し、あるいはまた、み仏がたのお姿を褒め讃えているのである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部経』参照）

春の小川　　「ちりちり」に秘める「どーどーどー」

文部省唱歌「春の小川」は一九一二年に発表された。作詞、高野辰之。作曲、岡野貞一。「故郷」「春が来た」「朧月夜」「紅葉」なども、このコンビによる作品である。「さらさら」行く小川は、一説によると、現在の東京・代々木辺りを流れる河骨川がモデルであるという。今はそのほとんどが暗渠であるそうだが、作詞した高野が当時、代々木に住んでいたというのがその根拠とされる。

高野は私のような長野県人にとっては、郷土が輩出した近代を代表する人物の一人である。出身は現在の長野県中野市豊田地区。志賀高原や斑尾高原を臨み、谷間に千曲川が流れる、奥信濃の入り口に位置するような地域である。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」と歌われる「故郷」の情景がまさにその通りの姿であろうがまさに今もなお残されている。

例年、春先に奥信濃を訪ねる。中野より北の飯山や木島平である。私が住む長野市からは車で一時間余り。県内でも有数の豪雪地帯だ。市街地の雪はもう取り除かれているものの、スノーバーなど大型店の駐車場には重機で積み上げた雪の山が土埃をかぶったまま眠り、田畑は雪に覆われたままで眩しいほどに白い。私が訪ねるのは山裾の斜面を上っていく途中にたたずむ御寺院である。

付近の集落ではいたるところに残雪があつて湯気を立て、山の坂道に沿った

側溝では溢れんばかりの雪融け水が滝のように流れ落ちる。冬の間に貯め込んだエネルギーが一気に放たれるのだ。奥信濃の春の訪れは「どーどーどー」と鳴り響く雪融け水の音とともにやってくる。

文部省唱歌であった「春の小川」は後に高野の文語体から林柳波による口語体へと二度ほど書き換えられる。この歌を何年生で歌わせるか、その改訂に伴う変更であった。はじめは「さらさら行くよ」ではなく「流る」。「すがたやさしく」は「匂いめでたく」、「ささやきながら」は「ささやく如く」などなど。ともあれ高野は小川が流れる水の音に春の息吹を感じ取った。その春の息吹を「咲けよ咲けよ」と岸のすみれやれんげを慈しみ育む声援として読み込み詩情とした。

こうした詩情は極楽浄土の情景を説き明かす経文のなかにも見ることができ、冒頭の『観無量寿経』の一節もその一つ。極楽にはいくつもの池があり、池の中央には如意珠王という宝玉が鎮座し水源となつて宝石のような水を湧き出すという。そして、その水が池から溢れていくつもの支流をなして溝を掘り、そこに数知れない蓮の華が咲き誇り、冒頭の引用のごとく、支流に流れ出た水が淀みなくそこに注ぎ込まれ、その音が数々の教えの名目を説き示す声として、

あるいはまた諸仏を讃える声として聞こえてくるといふ。

「春の小川」は「さらさら」と流れる。「さらさら」の一語にはほどよい水量、ほどよい速度の流れが感じられる。だからこそ「ささやく」が優しく響く。

小川が「さらさら」流れるのは、そこが平野の緩やかな傾斜であるからだ。でも、そうした流れに至るまでには、山あり谷あり、急流もあつたに違いない。小川を眺める高野の脳裏には、故郷奥信濃の、その山裾の側溝を「どーどーどー」と滝のように流れてくる雪融け水の力強さが浮かんできたのではないだろうか。さらさら流れる穏やかさの奥に、大自然の力強さが秘められているのだ。

極楽の水の流れは穏やかなものであると経典からは読み取れる。水の音が御仏の境地を表す御仏の教えを説く音声となるのだから当然だろう。しかし、御仏にも激しい修行に明け暮れた菩薩の時代があつた。極楽世界の水の流れには、穏やかななかにも御仏が菩薩であつた頃の精進の力強さが秘められていよう。その力強さが微妙の声となり、極楽におけるさまざまな声援になるのだと思う。

「春の小川」。誰か極楽で歌っていないだろうか。

(袖山榮輝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十七回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

在異郷十有余年、愈々帰国⑤



婦唱夫随による最後の切り札

突然、ドイツ駐劄日本大使の珍田捨己から呼び出された渡辺海旭は、珍田の私邸で懐かしい故国の夕餉の接待をうけながら帰国を促された。珍田はかつて海旭が浄土宗学東京支校在学中に英語の教師をしていたことがあり、おそらく宗門がその縁を頼りに、一向に帰国の要請に応じようとしないう海旭を説得してもらおうと画策したものと思われた。珍田によれば、宗門が海旭の帰国に期待しているのは、二年後に控えた法然上人七百年遠忌事業に対する海旭の舶来新知識の活用らしかった。

しかし珍田は、さすが老練外交官だけあって、単なるメッセンジャーとしての仲介人ではなく、彼独自の判断で、海旭にとって魅力的な提案をそれに加えた。一つは「日本が列強に伍していくために欠かすことができない社会的な事業の勧め」であり、もう一つは「珍田と海旭をつなぐ縁でもある母校・芝中学の

再生・充実」である。どちらも、海旭にとって「自らがなさねばならぬ仕事」を想起させ、帰心をつのらせるのに十分すぎる提案だった。海旭は思わず同意しそうになったが、踏みとどまって、「再考と保留」を願ひ出た。

すると、珍田は席を立ち、声を荒げた。「ここまで説得しても明快な返事が得られないのであれば、致し方がない。最後の切り札を切ることにしよう」と言って、パンパンと手を叩き、妻の岩を呼び寄せたのである。

和服姿で現われた珍田夫人は小腰を優しくかがめると遠来の客人に会釈をした。久しぶりに見る日本女性のたおやめぶりに、海旭は望郷の想いをつのらせたが、それは一瞬のこととて、その後の夫唱婦随の「共同作戦」に厳しく追い詰められることになった。

主人による引き合わせの儀礼がすむと、夫人は海旭をまじまじと見つめて言った。

「お坊さまの学者さまには、とてもお見受けできませんこと。まるで新進気鋭の外交官で

すわ。ご婦人方からの評判も、さぞやおよろしいのではないかしら」

この日の海旭は、外交官閣下に失礼があつてはならぬと、髪はリーゼントで固め一張羅のフロックコートに身を包んでいた。留学時代に友人の足立文太郎に送った写真をここに掲げるので、読者諸賢もご覧いただければ、珍田夫人の言葉に大いに納得されることだろう。



若き日の渡辺海旭

「これこれ、岩、失礼なことを。渡辺君が赤面しておるではないか」と珍田は妻をいさめたものの、それは形ばかりで、妻の言葉尻に乗ってさらに突っ込んできた。「実は、君のことを、十年も当地に長逗留してさっぱり帰国する気がないと家内に話したところ、女性ならではの直感からか、先程のようにご婦人方の評判が云々というもんだから、はたと閃

いてね。念のためにと調べさせてもらったところ、君にかかわるご婦人を一人特定できた」またぞろ「間諜」という言葉が海旭の胸中に浮んだが、それを察したかのように大使閣下は身を乗り出して言った。「何度もうが、よき情報なくしてよき外交なし、でね。それで、渡辺君、その御婦人とのことがあつて、君は帰国をためらつておるのではないのかね」珍田の「最後の切り札」によつて物の見事に凶星をさされた海旭は、答えに窮して深く息を呑んだ。

謎を解く鍵は女性の存在

さて、珍田夫妻を前に海旭はどんな答えを返すのか？ この先にはまことに興味深いやりとりが待っているのだが、それを語る前に、読者諸賢の胸中にわだかまつて消し去りがたい疑念に答えておく必要があるだろう。すなわち、いったい何を根拠に、生涯不犯で知られた渡辺海旭に女性がいたなどといえるのか、

である。

たしかに、筆者の知る限り、海旭当日の日記にも、友人知人の書簡や関連文書にも、それを類推させる証拠はない。しかし、だからといって、海旭に相思の女性がいなかったということにはならない。いや、いたのではないか、そう考えないと物語を先に進めることができない、珍田夫妻という人物の存在を知つて、そう思うにいたつたのである。

それ以前は、海旭がなぜ帰国をためらうのか、正直なところ、さっぱり謎が解けないでいた。所期の留学目的である博士号取得を首尾よく果たしたにも拘わらず、二年余も留学を延長、宗門から仕送りを打ち切られてもお帰国を逡巡するのは、いったいなぜなのか？ 筆者としては、海旭の真骨頂は帰国後の大車輪の活躍にあるので、早くそれを語ろうと思ひながらも、読者諸賢に納得してもらえないだけの帰国の理由が見つからない。先に、仕送りが停止されてから借財がかさんで、帰る

に帰れなくなったとも記したが、これとて二年前、博士号取得時に帰国をしていれば生じなかったことであり、帰国を遅延させたことの「結果」ではあっても、その「理由」と「動機」にはならない。

また、博士号を取得したものの、それを捧げるべき母親トナと仏門への導きの師であった端山海定の死去によって帰心が萎えたとも記したが、それは消極的なもので、何がなんでも帰国はしないというほど強い動機とすべきものではなく、他に何か強い事情があったと思われる。

だったら、その事情と動機とは何で、なぜそれが解除されて帰国にいたったのか？ それをつきとめないことには、海旭に再び故国の土を踏ませることはできないと悩んでいたところ、ついに海旭に帰国を促した人物がいたことを畏友である高楠順次郎東大教授の弔辞の中にみつけ、よし今度こそと勇んだのだが、珍田の日記や評伝を渉猟しても、何が海

旭の帰国を遅延させ、その後、何が逆に帰国を決断させたかの謎はいつかな解けない。とにかく帰国を果たしたという事実だけが残っているだけなのである。

ならば、そう記して先へ進めばいいではないか、といわれるかもしれないが、それは探偵小説でいえば大団円での謎解きを「動機なき殺人」とするようなもので、読者にとって著しく興味にかけるし、著者の無能ぶりをさらすようなものである。

ならばと、さらに珍田夫人の伝記を読みふけているうちに、行間から夫人の声が聞こえてきたのである。「お坊さまの学者さまらしくなくて、ご婦人方からの評判もさぞやよろしいのではないかしら」と。

これが私の妄想に火をつけた。そうだ、女性だ。もし渡辺海旭に相思の女性がいたのなら、すべての説明がつくではないか。博士号を取得してもなお彼の地に踏みとどまりビールを傾けワグナーを愛で、しかし帰国するや別人

のように酒を絶ち、無妻をつらぬいたことも。

とはいっても、重ねて記すが、確たる物証はもちろんのこと状況証拠ではない。あるとすれば、わが耳元へ聞こえてきた珍田夫人のつぶやきと、紅顔の美青年然たる往時の海旭の肖像写真一葉のみである。

では、今一度それをご覧いただき、それと唯一の手がかりにして、おそらく読者諸賢にも海旭の帰国の真の経緯はこれしかないとな納得してもらえらるものと信じて、筆者の妄想を先に進めることをお許し願ひ、本編へと戻ることになろう。

*

さて、珍田捨己ドイツ駐劄日本大使に「最後の切り札」をつきつけられた海旭は、しばらく黙考してから、固唾を飲んで答えを待つ夫妻に深々と頭を下げると、こう告げた。

「ち、珍田先生、ひ、一月、お時間をください」緊張と決意のあまり、いつも以上に吃音を募らせた。「き、きちんとした答えをもつ

てこちらに伺います」

海旭は、彼女に会って帰国をするか留まるかについて最終的な話し合いをしようと胸中で決意を固めていた。

どこか鷗外の「舞姫」にも似て

それから一月後、海旭は約束どおり、珍田邸の青銅製の呼び鈴を鳴らした。

玄関で迎えた岩夫人は、おもわず「あらまあ、どうなさったの」と声をあげると、奥へ声をかけた。「あなた、渡辺海旭さんが見えですよ。でも大変……」

帰宅して和服に着替えていたところらしく、兵児帯を結びながら姿をみせた大使閣下は、海旭のいで立ちを見て、すべてを察したようだった。

「ち、珍田先生、わ、私は……」と吃音を募らせる海旭を手で制すると、言った。

「渡辺君、君の決断のほどは、その恰好をみれば十分にわかった。まあ、上がりたまえ」

と海旭を応接間へと導いた。

海旭は、一月前はオールバックに撫でつけられていたリーゼントの髪型はさっぱりと剃り上げられ、フロックコートは質素な薄墨の法衣に、足元は革靴から草履に代わっていた。ソファの腰を沈めて向かい合っていると、大使は夫人にビールをもってこさせて、海旭へ勧めた。「渡辺君の新たな門出を祝して、君の大好物で盃をあげようではないか」

海旭は手をふって盃を押しとどめた。「さ、酒は一切やめました。故国に戻るからには福田行誠師にならって戒律を貫きます」

「ということは……」と珍田は海旭を質した。「無妻で通すということかね」

海旭が大きくうなずくと、「あら、そこまでなさなくつても」と夫人が割って入った。「日本にだって素敵なご婦人がいますわよ。なんなら私どもがご紹介して差し上げますから。ねえ、あなた」

珍田は、夫人の問いには答えずに、海旭と

謎の女性との関係の成り行きを推し量るのかのように、誰にともなくつぶやいた。

「たしか森林太郎軍医総監殿がドイツ留学中の色恋沙汰を描いた小説があったが……」

夫人が即座に返した。「かれこれ二十年ほど前だったかしら、森鷗外の筆名で発表され、世間を大いに騒がせた『舞姫』のことでしょう」

この謎かけ問答につかわれた「舞姫」とは、鷗外が陸軍省の派遣でドイツに三年間留学した時の体験を下敷きにしたといわれる掌編であった。将来を嘱望されたエリート官僚である主人公がドイツに留学中、困窮をきわめる家族を踊り子として扶ける美しいドイツ娘と恋に落ち、それが因で留学仲間の讒謗をうけて免官処分になるが、親友の伯爵秘書官の計らいで新聞社の特派員の職を得る。しかし、親友は主人公の将来を慮って、恋人と別れて帰国するよう促して同意させる。主人公の子を宿した踊り子はそれを知って、絶望のあまり狂気の人（パラノイア）となり、主人公は再び将

来を約束されて帰国するという筋書きである。「その『舞姫』がどうかなさったの？」と問い掛ける夫人には珍田は反応せず、軽く咳を払うと、海旭を見つめて言った。「渡辺君、主人公と恋人との仲を引き割いた親友と同じ役回りを、今回、この私が演じたと思っているのじゃないのかね」

「め、滅相もない」と海旭は大仰に頭を振ってみせた。「今回の私の帰国ドラマは私自身と彼女の決断によるものです。し、従って、彼女は、鷗外居士の小説の女主人公とちがって、パラノイアになる心配はありません」

「だったら後顧に憂いも残らず、なによりですわ」と夫人が割って入った。「でも、お二人の間にどんなことがあったのかしら。興味

津々ですわ、事實は小説よりも奇なりと申しますでしよう」

「よしなさい」と珍田は妻を制すると、海旭に向き合った。「それ以上は聞かないことにしよう。渡辺君、君にはつらい決断をさせた。そして君のご婦人にも。では、今後のことを相談しよう」

「は、はい」と海旭は返したものの、胸中にはわだかまりが残った。それは、「舞姫」の末尾で主人公が親友・相沢謙吉に対してつぶやく心中の科白と似通っていた。

「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は、世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり」（つづく）

浄土誌上句会

〈特選〉

獅子舞の影が実物より激し

●影

相川美智子

正月の風景。いまはあまり見かけなくなつたが、かつて獅子舞は二戸つつの玄関を訪れたものであった。怖いが愛嬌のある顔、動きの激しさが子供たちの目を奪つた。これはその影。大きく激しく動く影への視線である。

〈佳作〉門松の影が少年兵のごと

岬 健司

日向ぼこもしやもしやの犬の影

内藤 律子

横に影揺らして年始客帰る

小林 達郎

●絵

〈特選〉

歌留多する絵札一枚欠けたまま

佐藤 園枝

いろは歌留多、百人一首など正月の遊びに歌留多は欠かせなかった。読み札と取り札に分けるが一枚欠けてしまうのはとても残念で

ある。いろは歌留多では取り札が絵札。百人一首の場合は読み札が絵札であった。

〈佳作〉あぶな絵の足裏小きし冬深し

和田 延方

初買いの白の絵の具の太き胴

一松由布子

臘梅や夢二はおらず絵草紙屋

秋山あつこ

●自由題

〈特選〉不時着のように仏間の鏡餅

尾藤 悠一

いまだき仏間のある家は珍しい。いつもひっそりとして変わらない佇まいを見せる仏間に異変が起こる。仏壇にどかんと鏡餅が供えられているのである。不時着とは面白い形容である。まるで天からの降臨のようだ。

〈佳作〉

スナック四軒どん突きの花八手

新高 慶一

注連取る夜刃も研ぐ友は寄ると飯(回文)

井口 吾郎

恵方なり河童の像に銭をのせ

美園 吉孝



誌上句会〈編集部選〉

■影

障子いっぱい大きく鹿の影
日時計に影の動きて冬すみれ
日影にもふくらんでいる福寿草
ストープの前に影揺れナイフ研ぐ
人日のビルの影なるラーメン屋
咳をして障子の影の止まりをり
内藤隼人
仁科玲子
綾瀬朋恵
足立優作
安藤梨華こ
湯本佳祐

■絵

浮世絵のような男と冬の川
冬の日が絵本のように沈みゆく
絵葉書のような空なり初閻魔
あぶな絵に小さく鉢の福寿草
安西汀子
丸田由紀江
漆間 史
松本雅美

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一七年五月二十五日
発表・『浄土』二〇一七年七月、八月号
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

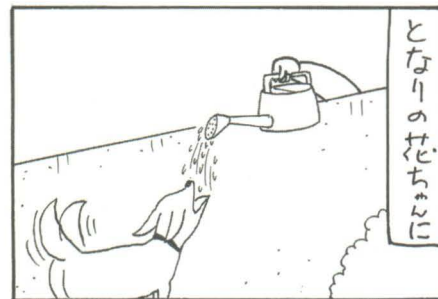
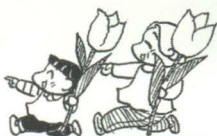
連歌自由題

■自由題

浮いた浮いた浜町河岸に奴風
からくりの時計飛び出す御慶かな
鯛焼きののりしろらしき焦げ目かな
母さんが湯豆腐ほどに壊れをり
よく日のさして餅花が笑い出す
甘酒や猪鹿蝶の帯締めて
お尻ぶん半分あけて仏の座
港まで続く火事跡寒昂
芯を研ぐむかし寒夜の肥後守
湯豆腐の暮れゆく明度南禅寺
春待つやガイドブックの口絵見て
冬夕焼描きし絵筆ちびてをり
湯谷理恵子
和田木鶏
野添蘭童
今市遼太郎
澤田友里江
時任典明
結城通弘
在藤優樹菜
財津有里奈
富山幸彦
遠藤岳人
明石美紀

さっちゃんね

かまちよろう



編集後記

花の下宗祖を惟う御忌の僧

岱潤

先日、佛教大学の先生が授業で採ったアンケートを見せていただいた。

学生に來世觀を問うたところ、最も多い答えが、勸善懲惡のにとらえるもので、良いことをすれば極樂に行き、悪いことをすれば地獄に行くというものだったそうです。また地獄・極樂觀が犯罪抑止力になっているという意見もありました。そして「法然上人の教えは素晴らしいと思うが、いまいち賛同は出来ない。悪人が全て救われたら、この世は無秩序になってしまふ」というものもあったといえます。

仏教學部ではなく一般学部の学生が多く、そのまじめさや勉強熱心さは伝わってきますが、宗教の問題を第三者的にとらえているようで、自分の問題となっていないように思われます。誰でもが救われることを、否定的に考える学生が多いことに驚きを感じました。少なくとも彼らは自分自身を、南無阿弥陀仏で救ってもらう存在ではないと思っているようにも思われます。社会的に問せられるような悪いことなどしてない自分は、悪人のはずがない、自分は充分極樂に往ける存在と認識しているようでした。

この青年たちに宗教を教えることは容易ではないでしょう。そしてこの青年た

ちの姿勢が、その親から受け継いだものだとしらもつとやっかいです。宗教は自分自身の問題としてとらえない限り、宗祖の思いに近づくことは出来ないと思うのですが。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十三巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年三月二十日
発行 平成二十九年四月二日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 三三三・五七八・六九四七
FAX 三三三・五七八・七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願院)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

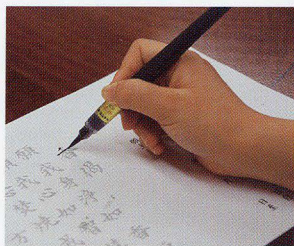
《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがいい。

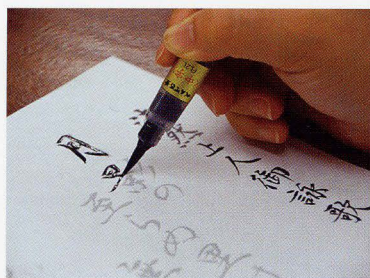


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。